



#018

2022 Winter

【えっと】

広島県



医師として広島県を
“えっと”楽しむマガジン



ETTO

Feature | 特集

中山間地域を支える 地域医療の現場！

～ 広島県 地域医療最前線 ～



広島県地域医療支援センター(公益財団法人 広島県地域保健医療推進機構)が発行する、医学生・研修医・若手医師に広島県の医療をPRするための広報冊子です。今号では神石高原町・世羅町・安芸太田町の3つの中山間地域の病院に密着してそれぞれが目指す地域医療を特集します。



医師として広島県を
“えっと”楽しむマガジン

ETTO

【えっと】

2022 Winter

#018

広島県地域医療支援センター(公益財団法人 広島県地域保健医療推進機構)



広島県の医師・研修医・医学生を応援します



ふるさとドクターネット広島にご登録ください！

「ふるさとドクターネット広島」は、広島県の地域医療を担う医師や医学生の皆様とのネットワークづくりを目的としたサイトです。

広島県地域医療支援センターが皆さまをサポートします！

- ・スタッフが全国どこでも面談にお伺いします。
- ・臨床研修病院や若手医師勉強会等の情報を随時発信しています。ぜひ、「ふるさとドクターネット広島」をご覧ください！

ふるさとドクターネット広島とは？

登録メリット

就業の個別相談を無料で受け、月1度のメルマガの他、広報誌ETTOをお届け

信頼

医療法に位置付けられた広島県地域医療支援センターが運営する公的なホームページ

充実

求人情報、取り組み状況、医師インタビューなど充実の内容で広島県の医療情報が満載！

相談コーナーもあります！子育ても応援しています！

ふるさとドクターネット広島
<https://www.dn-hiroshima.jp>

広島県地域医療支援センター
〒732-0057 広島市東区二葉の里 三丁目2-3 広島県医師会館4階
TEL: 082-569-6491 FAX: 082-569-6492 E-mail: iryou@hiroshima-hm.or.jp





病院長
原田 亘先生
Wataru Harada
広島県出身
広島大学卒業(1987年)

内科
今村 かずみ先生
Kazumi Imamura
広島県出身
自治医科大学卒業(2015年)

内科
松原 直矢先生
Naoya Matsubara
広島県出身
自治医科大学卒業(2017年)

編集制作
「民間医局」株式会社メディアカル・プリンシプル社
Art Director: 勝又シゲカズ B1TB Inc.
Writer: 安藤 栢
Photographer: 猪俣 淳

患者と家族の生活を考える
地域医療に大切な視点

原田：松原先生は当院に赴任されて2年、今村先生は半年ですが、お二人ともしっかり診療を担当してくれていて、とても頼もしい存在です。
今村：ありがとうございます。私がここに来て一番驚いたのが、とにかく元気な高齢者が多いことです。100歳を超えていても歩いて病院にいらっしやいます。
松原：それには僕も驚きました。80歳だった「お若いな」と感じるくらいですよ(笑)。

今村：私は祖父母や曾祖母と一緒に住んでいたことがあり、高齢者医療に関わりたいという気持ちで医師になりました。今まさにそれが実現できているので、毎日が充実しています。

松原：僕がこれまで勤務していた急性期病院では、治療が終わった患者さんは療養型の病院にお送りしていました。ここは逆に患者さんを引き受ける側の病院なので、そうした病院ごとの役割の違いを感じながら診療にあたっています。

原田：当院は神石高原町で唯一の入院できる病院ですから、後方支援で重要な役割を果たしています。例えば、急性期病院でがんの初期治療をした患者さんを引き受け、経過を診ながら療養する。この地域にとってはなくてはならない病院だと自負しています。

今村：はい。それを実感しながら日々

地域住民に愛され、信頼される
安心の土台となる病院

神石高原町立病院

「星降る里」としてもその名が知られる、広島県神石高原町。町で唯一の入院できる医療機関が神石高原町立病院である。2022年5月には明るくきれいな新病院へと生まれ変わり、初期救急医療から慢性期、在宅医療まで幅広い医療を展開している。

診療をしています。病院で患者さんを待つだけではなく、巡回診療や訪問診療にも力を入れていますよね。私は訪問診療で4人の患者さんを担当しているのですが、病院での診療とはまた違った経験ができています。

松原：僕も月に1回、2〜4人の患者さんの訪問診療をしています。以前、勤務していた病院で末期がんの患者さんを診る機会があったのですが、そうした患者さんたちが自宅療養でどのように過ごさ

れているかが、ここに来てよく分かりました。もともと関心があった在宅での看取りも経験させてもらえて、とても勉強になっています。

原田：神石高原町は高齢化率が50%を超えていますので、高齢者への医療が中心。そのため認知症や肺炎、フレイルなどへの対応が重要な課題です。だからこそ、講演会での啓発活動や体操指導などを通して、地域の皆さんへの働きかけを積極的に行っています。

松原：高齢者医療では、患者さんが抱える背景を知らない、なかなか退院まで持っていけなかったり、治療がうまくいかなかったりすることもあります。

今村：そうですね。私が担当している認知症の患者さんが「家に帰りたい」とずっとおっしゃっていたのですが、訪問診療や訪問看護をうまく使いながら調整できないかを、ご家族と話し合っているところです。コロナ禍で簡単には入退院ができない中、何とか患者さんやご家族の希望に応えていきたい。一番悩んでいるところなんです。

原田：病気だけではなく、患者さんを取り巻く環境を把握して、そこからどんな医療を提供すればよいかを考える。それが地域医療をする上での大切な視点ですよ。二人ともここでの経験を通して、患者さん一人ひとりと向き合うスキルが身に付いているのではないのでしょうか。

医師一人での当直体制で
救急の対応力が磨かれる

今村：それから、医師として鍛えられていると感じるのが、一人で担当する当直



社会医療法人社団陽正会
神石高原町立病院
〒720-1522
広島県神石郡神石高原町小島1709-3
TEL: 0847-85-2711
FAX: 0847-85-2754
E-mail: info-jth@youseikai-grp.jp

Hospital Director: 原田 亘

■病床数 ……60床
■医師数 ……6名

<https://www.youseikai-grp.jp/jth/index.html>

です。私は内科医ですが、小さな傷だったら縫合もします。大きな病院では外科の先生にお願いしていたようなことも自分でしなければならぬので、もちろん緊張もしますが、貴重な経験をさせてもらっています。

松原：たしかに一人で当直をすると鍛えられますよね。僕は将来的にも地域医療に携わっていきたくので、今から幅広い症例を積極的に診ておきたいなと思っています。

原田：二人が積極的にチャレンジしてくれてうれしいです。私が当院に来てからもうすぐ30年になりますが、初めの頃は大きな縫合処置をした日には、不安で一晩中眠れず、翌日、安定した傷口を診てようやく安心したことも。当時、汗をかきながら乗り越えたことが、医師としての方向性を決めるのに役立ったと思っています。

松原：診療科に限らずいろいろな経験したい先生にはおすすすめですよ。僕は、ともすれば現状で落ち着いてしまうタイプなので、常にチャレンジし続けなければならぬ環境が合っていました。

原田：当院には広島大学の学生さんたちが、年間20人ほど実習に来ているのですが、将来一人でも多くの医師が地域医療の現場で活躍してくれることを願っています。

今村：学生時代は、部活でも自分の趣味でも、とにかく何かに打ち込んでおくといいですよね。いろいろな人と出会って、いろいろな考えに触れておくと、医師になつてから患者さんの考えを柔軟に受け止められるようになると思います。

松原：同感です。僕は学生時代、バレーボール部だったのですが、6年まで部活に打ち込んでいました。そのおかげでコミュニケーション力が身に付いたなと、経験できることは全部やっておいて損はないはずですよ。

原田：どんなに回り道しても、人生は無駄はありません。今の学生さんたちは、コロナ禍で不自由な思いをしているでしょうが、その中でも工夫すればできることはあります。当院でも見学を受け付けていますので、興味があればぜひお越しください。私たちは惜しみなく支援をした



病院長
来嶋 也寸無先生
Yasumu Kijima
広島県出身
大分医科大学卒業(1999年)



整形外科
角 悠司先生
Yuji Kado
広島県出身
広島大学卒業(2017年)



内科
頼島 悠佳先生
Haruka Yorishima
広島県出身
広島大学卒業(2017年)

「患者さんから「ありがとうございます」と言ってもらえると、それが励みになって「もっとスキルアップをしたい」と勉強をする。当院ではその好循環が生まれています」(来嶋先生)

肢だけを診ていてはダメだな。それで、あまり経験のなかった人工関節手術についても勉強して、できるようになったのです。**頼島**：患者さんからのニーズがあるので、「専門じゃないから診られない」とは言えない環境ですよ。
来嶋：そうですね。全身の手術をするようになったら、あっとい間に口コミが広まって、翌年には手首よりも腰の手術

件数の方が上回りました。
角：各診療科の先生たちに「この地域の患者さんではできるだけここで診ていこう」という心意気があったって、すごくいい病院だなと思います。
来嶋：自分の専門を一つ見つけて極めるのもいいですが、やらざるを得ない状況の中で専門外のこともやってみると、それが医師としてのスキルアップにつながります。整形外科の場合、治療の成果がすぐに現れるので、患者さんから感謝される。それでまた「このスキルを身に付けたい」と思うように。そうやって医師としてのやりがいを感じながら成長できます。

**患者の暮らしに寄り添い
ベストな医療の選択を**

角：都市部に比べると世羅町は患者さんの年齢層が高いですよ。90代でも元気に農作業をされています。整形外科で診療をしていると、たとえ痛いとこがあっても「草取りがしたい」「畑に行きたい」という方がたくさんいらっしゃいます。
頼島：患者さんたちの生活サイクルもだいぶ分かってきました。農作業が終わると血糖値が高くなるとか、この時期は脱水症になりやすいとか、この地域ならではの疾患の特性がありますよね。
角：たしかに農作業をしている患者さんからは、「手術は冬にしてほしい」と言われることも。「肩が痛い」と草取りができなくて困る」という訴えもよく聞きます。
頼島：あとは方言が身に付いたかもしねえたら、世羅町出身の看護師さんがそつと教えてくれました。

**患者の医療ニーズに応えながら
医師としてのやりがいが実感できる**

公立世羅中央病院

豊かな山々に囲まれる、広島県世羅町にある公立世羅中央病院。
周囲の医療機関が診療を縮小していくなかで、
入院・手術ができる病院として救急患者を一手に引き受けている。
19ある診療科で幅広い疾患に対応しているのも特徴。



来嶋：「にがる」は痛いとか痺れるとか、ちょっと嫌な感じがするときに使われるよね。
頼島：はい。そのニュアンスが分かるようになりました。それから、ここに来て驚いたのが、治療の選択についてです。世羅町には透折導入ができる施設がなく、車で30分かかる大きな病院に患者さんを送らなければなりません。でも、患者さんの中にはそうした治療を選択せずに「ここでできることをお願いします」という方もいらつしゃって。その方にとってのベストな医療は何かを考えるようになりました。
来嶋：二人とも丁寧に患者さんを診てくれているし、とても貪欲に学んでくれているよね。これから地域医療に携わりたいと思っている若い先生たちには、最先端の医療や基礎研究に関わるなど、選肢肢を狭めずにいろいろな場所で経験を積んでほしいです。その経験が地域医療の現場で生かせると思います。
頼島：私は学生時代から総合診療に憧れているので、専門として腎臓の勉強をしながら、幅広い診療を行っていきたく

来嶋：頼島先生と角先生は同じ広島大学の出身で同期ですよ。もともと地域医療に興味があったのですか？
頼島：私の父は広島で町医者をしていたのですが、幼い頃から父が診療している姿を見てきました。自分の住み慣れた街で、将来、私も地域の人たちを支えていきたい。そう思ったのが地域医療に興味を持ったきっかけです。
角：病気を治すだけでなく、患者さんの生活まで支えているのが地域医療の魅力ですよ。医師になる前に抱いていた、地域の人たちの幸せを考えながら医療を実践していきたいという気持ちは、今もずっと持ち続けています。
来嶋：私はここに赴任して13年になりましたが、世羅町があり続けるために当院はなくてはならない病院だと思っています。それくらい地域の皆さんから求められているということ。二人とも、それを日々の診療で実感できているのではないのでしょうか。
頼島：はい。内科医として幅広く診療できる知識やスキルが求められているのを感じます。当院に来てから、これまで携わったことなかった症例を診る機会も増えていきます。
角：外科でも内科でも、幅広く疾患をカバーしていますよね。僕は来嶋先生と同じ整形外科ですが、先生が手の先から各関節や脊椎・足の先に至るまでの全身の手術を担当されていて驚きました。
来嶋：専門は上肢ですが、今では全身を診ています。ここには腰や股関節、膝を診てほしいという患者さんがたくさんいて、上

**幅広い知識やスキルの習得で
必要とされる医師を目指す**



公立世羅中央病院

〒722-1112
広島県世羅郡世羅町本郷 918-3
TEL：0847-22-1127
FAX：0847-22-3785
E-mail：soumu@serachuo-hp.jp

Hospital Director：
来嶋 也寸無

■病床数 ……155床
■医師数 …… 13名

http://www.serachuo-hp.jp



地域医療の現場で活躍する
医療人の育成に力を入れる

安芸太田病院

オンライン診療やAI問診システムの導入など、最新の情報技術を積極的に取り入れている安芸太田病院。高齢化と過疎化が進む地域のこれからの医療のあり方を模索しながら、医師たちが十分に力を発揮できる環境を整えている。



病院長
結城 常譜 先生
Tsunetsugu Yuki
広島県出身
広島大学卒業(1990年)



内科
延岡 悠樹 先生
Yuki Nobuaki
広島県出身
自治医科大学卒業(2017年)

高度急性期病院との連携で
地域包括ケアを実践

結城：私たちの病院が地域の中で果たす役割は、住民の皆さんの「安心」を支えること。ここから大きな病院までは一番近くても30キロ以上離れていますから、この病院があることが安心につながっているのではないのでしょうか。延岡先生は赴任して半年になりますが、診療には慣れましたか？

延岡：はい。実は学生の實習の時、臨床研修の時、そして研修終了後別の病院の勤務時に当直のサポートでここに来ていたので、特別な縁を感じています。初め

て来たときから、地域との結びつきがとても強い病院だなと思っていました。
結城：高齢者に多い骨折や肺炎など、地域で救急対応をしていますよね。高度急性期医療については広島市立北部医療センター・安佐市民病院（※以降、安佐市民病院）と連携を取り、当院では治療後の患者さんを受け入れて、地域包括ケア病棟で在宅復帰までを支援する流れができています。

延岡：僕は内科を担当していますが、幅広い疾患を診させてもらっています。都市部の大きな病院であれば他の診療科にお願いするようなことも、ここでは自分ができる範囲でなるべく対応しています。一つの診療科で治療が完結できれば、患者さんの通院の負担も減らせるからです。その分、常に自分の診療スキルを上げていかなければならないと思っています。

結城：「腰が痛い」といった整形外科を受診する患者さんでも、糖尿病や高血圧といった持病がある患者さんがほとんど。一つの疾患だけを診ていけばよいという

ことに、あらゆる方面から患者さんを診てくれていますよね。
延岡：それから印象的だったのが、この地域を離れたくないと思っている患者さんが多いことでした。短い入院でも「できればここで診てほしい」と言われます。だからこそ、その希望に応えたいという気持ちになります。

結城：それが地域医療で求められていることなんです。しっかり向き合ってくれてうれしいです。

延岡：結城先生もそうですが、この地域の医療を一手に引き受けなければならぬ責任感の中で、何十年と長く勤めている先生たちは本当にすごいと思います。先生たちが大事にしている、患者さんファーストの姿勢を、僕も診療で心がけています。

「医療人の育成」が病院の理念。医師だけでなく、看護師や栄養士、救命救急士、リハビリスタッフに対する教育にも力を入れている。

ことではありません。自分の専門以外の分野でも診療しなければならぬ環境なので、総合診療を学びたい先生たちにとっては、魅力的だと思います。
延岡：そうですね。僕は飽きっぽい性格なので、一つの疾患を突き詰めるよりも、いろいろな疾患を診られる方が向いているなど。だからここでの診療にやりがいを感じています。

結城：延岡先生は診療科の枠にとらわれ

ず、あらゆる方面から患者さんを診てくれていますよね。
延岡：それから印象的だったのが、この地域を離れたくないと思っている患者さんが多いことでした。短い入院でも「できればここで診てほしい」と言われます。だからこそ、その希望に応えたいという気持ちになります。

結城：それが地域医療で求められていることなんです。しっかり向き合ってくれてうれしいです。

延岡：結城先生もそうですが、この地域の医療を一手に引き受けなければならぬ責任感の中で、何十年と長く勤めている先生たちは本当にすごいと思います。先生たちが大事にしている、患者さんファーストの姿勢を、僕も診療で心がけています。

オンライン診療の導入で
これからの地域医療を支える

結城：若手の医師のスキルアップのために、安佐市民病院と連携して教育に力を入れているのも当院の特徴です。オンラインで定期的



に合同カンファレンスを開き、安佐市民病院の先生方に相談できる機会を設けています。
延岡：すごく勉強になっていきます。ちょっとした疑問を気軽に聞くことができますし、最新の医療

にも触れることができます。それから先進的な取り組みとしては、かなり早い段階からオンライン診療を始めていますよね。
結城：コロナ禍での後押しもありましたが、当院は広い範囲の医療圏をカバーしている、高齢化と過疎化が地域の課題です。病院まで遠く来て来れない患者さんがたくさんいますので、そうした取り組みは欠かせないと思っています。

延岡：僕も最近、ご自宅にいる患者さんをオンラインで診療しました。画面を通して患者さんの生活のすべてを理解することはできませんが、少なくとも診察室で患者さんを診るよりは生活の場を想像しやすいです。

結城：通信機器の扱いに慣れていない患者さんに対しては、看護師を派遣して診療を補助する方法を試しています。

延岡：訪問診療と組み合わせるなど、これからの地域医療には必要なシステムになりそうですね。外来で使っているAI問診システムも便利で助かっています。あらかじめ想定すべき疾患がリストアップされるので、診療に役立ちます。

結城：問診で得た情報を電子カルテに打ち直す手間も省けますから、医師の負担は軽くなりますよね。次の段階では、スマートフォンやパソコンを使い慣れている患者さんに対して、病院に来る前に自宅で入力できるシステムを導入していきたいと考えています。延岡先生は、今後の診



安芸太田病院

〒731-3622
広島県山県郡安芸太田町大字下殿河内 236
TEL : 0826-22-2299
FAX : 0826-22-0623
E-mail : daihyo@akiota-hp.jp

Hospital Director :
結城 常譜

■ 病床数 …… 149床
■ 医師数 …… 9名

http://www.urban.ne.jp/home/kakehp/

療で力を入れていきたいことはありますか？
延岡：高齢化率が高いことと、独居の方が多いのが要因になっていると思うのですが、アルコール依存症の患者さんを診る機会が多いので、外来でももう少し時間をかけてアプローチしていきたいと思っています。それから、日々変わっていく医療についていくためにも、自分の診療レベルを上げる努力を続けたいです。

結城：学生さんや研修医の皆さんには、いろいろなことに目を向けてもらいたいなと思います。興味を持って見てみると、どの分野も面白いはずですよ。

延岡：そうですね。もし進路が決まっていなかったとしても、そのときにできることを一生懸命やりながら楽しめばよいと思います。僕自身、明確な目標があったわけではないですが、いつも目の前にある「やらなければならぬこと」に向き合ってきました。そうしてたどり着いた地域医療を、今は楽しんでます。

結城：当院では患者さんを全人的に診る地域医療を実践していますので、ぜひ見学や實習に来てください。